

東京学芸大学附属高等学校

第 21 回 公開教育研究大会

大会要項

研究主題

観点別学習状況の評価を活かした

カリキュラム・マネジメント

～いま問われる学習評価と学校の在り方～

令和 4 年 11 月 5 日

第 21 回公開教育研究大会にあたって

東京学芸大学附属高等学校長 大野 弘

本日の研究大会は、東京都教育委員会にご後援いただきました。同委員会には、日頃より本校の教育活動にご支援ご協力いただいております。改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、令和 3 年 1 月 26 日付の中央教育審議会（中教審）答申では、急激に変化する時代に対応し、全ての子供たちの可能性を引き出すため、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するとしています。原則として、個別最適な学びは少人数での教育が、協働的な学びはある程度の多人数の集団での教育が適していると考えられます。つまりは、この 2 つの概念は排反事象だとも言えます。私どもは、この 2 つの目標を両立させるためには、ICT の活用と意図的なカリキュラム・マネジメントが必要だと考えております。特に、個別最適な学びの実現には、個々の生徒の学習状況を多面的かつ的確に捉える観点別学習状況の評価が必須です。

今回の研究授業では、各教科・科目における学習状況の把握を通じて、学校全体のカリキュラム・マネジメントを行い、学校に求められる生きる力の育成を試みた成果を発表いたします。内容としては、国語において主体的に学習に取り組む態度をいかに評価するか、数学においてレポートや試験の結果をどのように観点別評価に落とし込むか、理科において主体的に判断・意思決定することや成果物をどのように評価していくか等について、授業を通じて発表いたします。また、地歴公民では、新科目『世界史探究』において資料の活用や『問い』を意識した授業展開について発表いたします。

さらに、午後からの研究協議会では、本校教員の提案をもとに、参加者の先生方で協議していただき、文部科学省初等中等教育局視学官藤野敦先生をはじめ多数の助言講師の先生にご助言いただきます。参加者の皆様の日ごろの疑問やお悩み、あるいはうまくいったご工夫などお話しいただき、参加者全員で深化させていきたいと思っております。専門的知見の深い講師の先生方のお話を伺える良い機会でもあるかと存じます。

最後に、講演会がございます。東京大学名誉教授市川伸一先生に、新教育課程における観点別学習状況の評価というテーマでお話しいただきます。観点別学習状況の評価を生徒の資質・能力の向上にどう生かすか、興味深くかつ本質的な内容です。本校における教育研究にとって大いに学ぶべき内容であるとともに、ご参加の先生方にとっても、それぞれの勤務校においてすぐにでも活用できる内容だと思います。

本日の内容で先生方の学校で使えそうなことは是非お試しください、その結果を本校に教えていただければ幸いです。それらの反応をもとに本校の研究をさらに進めていきたいと思っております。それでは、本日の研究大会を十分にお楽しみください。

目次

巻頭言	1
公開授業タイトル・研究協議会タイトル一覧, 講演会テーマ	4
趣旨説明	7
公開授業Ⅰ・Ⅱ（芸術科のみ, 10:00～10:50・11:00～11:50）	
現代文B	13
世界史A	14
数学Ⅰ	15
生物基礎	16
地学基礎	17
音楽Ⅰ	18
工芸Ⅰ	19
書道Ⅰ	20
コミュニケーション英語Ⅱ	21

研究協議会 12:45～14:45

国語科	22
地歴公民科	23
数学科	24
理科	25
芸術科（音楽）	26
芸術科（工芸）	27
芸術科（書道）	28
外国語科（英語）	29

講演会 15:00～17:00

趣旨説明	31
------	----

本日の時程

10:00 ～ 10:50		11:00 ～ 11:50		12:45 ～ 14:45		15:00 ～ 17:00	
公開授業Ⅰ （芸術科）	休憩	公開授業Ⅱ （芸術科）	昼休み	研究協議会 （全教科）	休憩	講演会	

公開授業タイトル一覧

教科	科目	授業者	授業タイトル
国語	現代文B	日渡 正行	評論單元における「主体的に学習に取り組む態度」評価の試み
地歴公民	世界史A	小太刀 知佐	世界史探究を見据えて ～ 帝国主義を理解する ～
数学	数学Ⅰ	木部 慎也	相関係数を見直そう
理科	生物基礎	小境 久美子	学びを社会へつなげる ～「遺伝子とそのはたらき」ゲノムを題材に～
	地学基礎	齋藤 洋輔	地学基礎における「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラムづくり(2) ～ 生徒の主体性を育てるための評価 ～
芸術	音楽Ⅰ	居城 勝彦	日本歌曲を味わおう
	工芸Ⅰ	神田 春菜	人々の生活を心豊かに演出しよう ～ キャンドルスタンドの制作 ～
	書道Ⅰ	荒井 一浩	米芈の書風を捉えよう
外国語 (英語)	コミュニケーション 英語Ⅱ	光田 怜太郎	知的にチャレンジングな言語活動の試み

研究協議会テーマ一覧

教 科	研 究 テ ー マ
国 語	国語科のこれまでの蓄積と観点別学習状況の評価
地歴公民	地歴科・公民科における観点別評価の実践と課題
数 学	観点別学習状況の評価の充実と深い学びの実現に向けた単元計画 ～ 単元「データの分析」に焦点を当てて ～
理 科	学びを充実させるための観点別学習状況の評価
芸 術 (音楽)	音楽文化として日本歌曲を取り上げる際の教材化の視点
芸 術 (工芸)	観点別学習状況の評価の課題 ～ 主体的に学習に取り組む態度に着目して ～
芸 術 (書道)	博学連携と観点別学習状況の評価
外国語 (英語)	高校生の知的好奇心にあった長文読解と言語活動に適した英語教材について考える。

講演会テーマ

テーマ 「新教育課程における観点別学習状況の評価 ～ 資質・能力の向上にどう活かすか ～ 」

講 師 市川 伸一 先生

(東京大学名誉教授、帝京大学中学校・高等学校校長補佐、中央教育審議会教育課程部会副部長、
児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ主査)

趣旨説明

第 21 回公開教育研究大会 趣旨説明

東京学芸大学附属高等学校 研究部

平成 30 年に告示された新しい高等学校学習指導要領（以下、新学習指導要領と表記）では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を踏まえた「学習評価の充実」、「教科・科目等の新設や目標・内容の見直し」、および「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」が示され、それらの教育活動の効果を最大化するものとして各学校に「カリキュラム・マネジメント」の実施を求めている。これは、平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申において、「答えのない課題」が山積するこれからの社会においては、学校と社会が連携して資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」や、各学校において学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現が急務とされていたことを受けたものである。

本校では、平成 24 年度より文部科学省指定事業スーパーサイエンスハイスクール（以下 SSH と表記）に指定されて以降、コンピテンシーの育成を意識したカリキュラム開発を行ってきた。そこでは本校で育成すべき資質・能力として、「5つの重点課題」（課題を発見する力、科学的なプロセスで問題を解決する力、発信する力、展望・計画をもつ力、関係を構築する力・協働する力。図 1 参照）を設定し、それらの能力を高める授業・カリキュラムを構築しながら、特にパフォーマンス評価を充実させることに重点をおいた（平成 28・29 年度）。これを受けて平成 30 年度から令和元年度にかけて、「5つの重点課題」に加えて本校で育成したい生徒像を意識し、「SSH 探究」をコア科目としたカリキュラム・マネジメントの作成およびそれに基づいた授業開発を実施した。

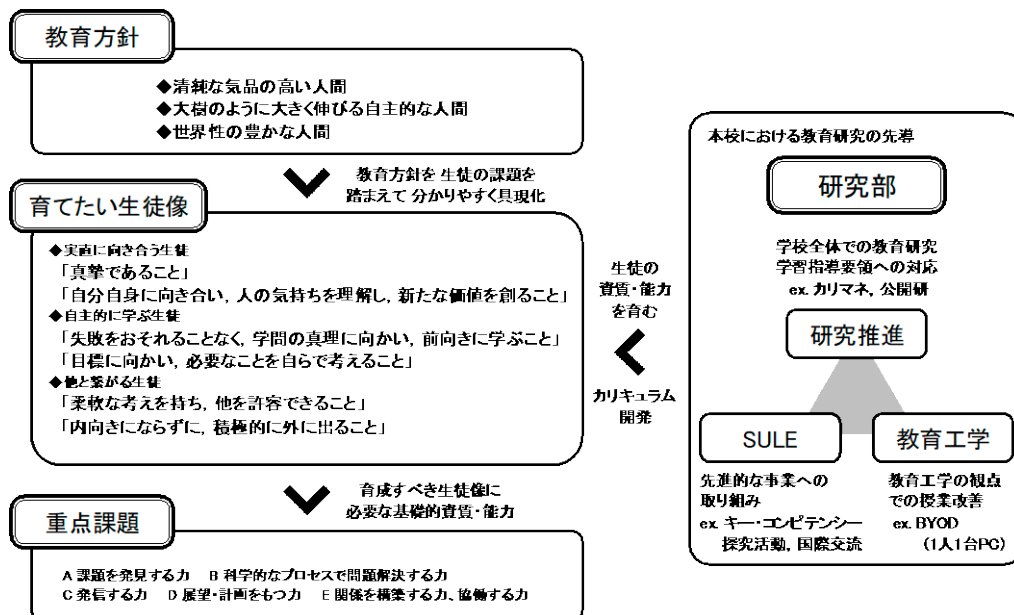


図1 本校における教育研究の方向性（ゴールイメージの整理，平成 30 年度作成）

令和元年度からはコンピテンシー・ベースのカリキュラム開発にも継続して取り組んでいるが、新学習指導要領の施行が迫ったことから、同時に導入される観点別学習状況の評価について各教科で検討を重ね、育成すべき資質・能力の3つの柱に対応した学習評価に向けた準備・試行を進めた。「知識・技能の習得」については従来から行われている考査で確認するとともに、本校の特色として伝統的に行われてきたさまざまな実習のレポートなどのパフォーマンス課題を活用して評価を行うことにした。「思考力・判断力・表現力等の育成」についても考査における応用問題などの発展的な問題とパフォーマンス課題を評価対象とした。本校でも各教科で検討を重ねた「学びに向かう力・人間性等の涵養」については、パフォーマンス課題や学期ごとの振り返りを書かせた紙面などを見ることにした。評価にあたっては、考査については基本的に得点を利用することとしたが、パフォーマンス課題や振り返りシートについてはルーブリックを作成し、課題を提示する際に生徒にあらかじめ提示した上で評価を実施するようにしている。ルーブリックの評価規準については現在も各教科で模索が続いており、実際に適用しながらよりよい評価ができるよう年々アップデートしていく必要性を感じている。本校では以前からパフォーマンス課題を積極的に導入してきたものの、考査を行う教科ではどちらかというと考査の成績が評価に大きく反映されることが多かったが、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力」の評価が導入されたことで、レポート等の課題に真摯に取り組んでいる生徒に高い評価ができるようになったことは、高等教育との接続の面からも大いなる前進といえる。また、以上の3観点の評価を年度末に評定に直す際のそれぞれの観点の評価の比率については、各教科の特性を鑑みて教科ごとに決めることにしているが、これについても学校の指導目標などをもとに校内で議論が続いている。以上の点について、教科単位で行われる研究協議会で本校の実施状況を報告させていただくことにしているが、他校の状況について情報交換をさせていただくとともに、よりよい評価の実施に向けて活発な議論をさせていただきたいと考えている。

また、観点別学習状況の評価の実施にともない、新しい時代に求められる資質・能力の育成に向けた教育活動に向けた検討も進めている。観点別学習状況の評価においては生徒の学習状況の把握をするとともに、生徒の学力向上のための教員の授業改善を求めている。本校では主体的・対話的で深い学びをどのように実現するか、質の高い理解を図るための学習過程にどう改善していくかについて重点課題として取り組んできた。主体的・対話的で深い学び、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの学習過程の改善が求められているが、生徒はある程度の基本的知識がないと深い学びにつなげることができないと考えられる。一方で知識をただ暗記するだけでは何の役にも立たない。理解をともなって知識を習得し、それを活かして主体的・対話的で深い学びを行い、生徒が将来生きていくための資質・能力を身につけさせ、社会で活かすことができるようにすることが求められている。午後の講演会においては、このような点について、東京大学名誉教授で帝京大学中学校・高等学校校長補佐である市川伸一先生をお招きして、児童生徒の学習評価に関するワーキンググループにて議論された観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえ、「指導と評価の一体化」を具現化した授業実践についてお話いただく。

また、急速に変化し、予測が困難な時代を生きていく生徒たちは、各教科で学んだことを基盤として、

様々な視点から問題を分析し、統合的に問題を解決していくことができる総合的な資質・能力を身につけてもらいたい。そのために各教科間の連携を考えるカリキュラム・マネジメントは欠かせない。また、問題を設定し、各教科の知識を総合的に活かして問題解決に取り組む場が探究活動の学習である。探究活動を含めて、各教科間のカリキュラム・マネジメントをどのように構築し、将来の社会で生きていくための力をどのようにつけさせるかが、いま学校に最も求められていることと考えている。このような背景も踏まえ、講演の中では「習得と探究のサイクル」などについても市川先生からお話をうかがう予定である。

最後に、本校では将来を見据えた教育研究を常に進めており、本大会で発表した内容は今後さらに進化させられるものと考えております。みなさまには本校の研究をご覧いただき、ぜひ実践に生かしていただければと思いますが、今後の本校の研究の糧になるべく貴重なご意見をぜひ頂戴いただきたいと思います。本日は、参加者のみなさまから忌憚のないご意見を多くうかがわせていただき、活発な意見交換の場にさせていただきたいと考えております。

公開授業Ⅰ・Ⅱ

(芸術科のみ，10:00～10:50・11:00～11:50)

評論単元における「主体的に学習に取り組む態度」評価の試み

国語科（現代文 B） 日渡 正行

今年度から学年進行で実施されていく新しい学習指導要領では、学習評価について、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。」と述べている。生徒が学習の意義や価値を実感するのは、どのような時だろうか？ 「知識」や「技能」に関して言えば、できなかったことができるようになった時、実感できるだろう。一方で、生徒個人のあり方と密接に結びつく「態度」について実感するのは、なかなか難しいのが実情だろう。「主体的に学習に取り組む態度」への評価について、生徒が実感できる可能性を示すことができれば、「主体的・対話的で深い学び」にも結びつくのではないだろうか。

また、学習指導要領では、「評価」の「妥当性や信頼性」についても言及している。「態度」への評価については、生徒自身が実感や手応えを得にくいのであれば、自分の評価の妥当性についても、理解できない可能性はある。文部科学省は平成 31 年 3 月 29 日の通知で、従来の「態度」への評価の様々な課題を示しており、提出物の有無や授業中の積極性など「性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価」については否定的である。どのように評価すれば「妥当性」「信頼性」を得られ、よりよい「態度」に結びつく「評価」ができるのか、工夫が求められている。

今回、科目としては「現代文 B」で実施するが、今年度から開始する「言語文化」「現代の国語」あるいは「論理国語」「文学国語」につなげるかたちで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を考えていく。昨年度（令和 3 年度）、本校の第 20 回公開教育研究大会においても、「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価するかということについての提案があった。昨年度は、「言語文化」「現代の国語」を想定しつつ、生徒が自身を評価するプロセスを観察することで、粘り強く学習に取り組んでいたかどうかを見ようとしていた。今年度は、「現代文」の評論単元における評価を提案する。

今回の公開授業は、尼ヶ崎彬「姿——日本のレトリック」（北原保雄監修（平成 29 年）『現代文 B 改訂版 下巻』大修館書店）を扱う。授業前後の変容と最終的な振り返りの中から生徒の主体的な取り組みを読み取り、評価につなげていく。授業で扱う前に読解に関わる課題を示し、入力してもらう。読解の授業を実施し、その最後に同様の課題に取り組む。授業を経て変化した部分を自覚してもらうとともに、その変化を、今回の評論の読解に限定せず、活かしていけるかどうかを考えてもらう。読解するにあたっての知識や技能、あるいは、課題に取り組む際の思考や表現の力をはかるのはもちろんであるが、授業前後の自身の現状把握と成長の自覚を見ることで、「主体的に学習に取り組む態度」が見えてくるのではないかと、ということを提案したい。

世界史探究を見据えて

～ 日清戦争を再考する ～

地理歴史科（世界史 A） 小太刀 知佐

今年度より、本校でも新科目の歴史総合が始まった。知識詰め込み型の歴史科目からの脱却、日本史と世界史の融合、生徒自身が課題を設定し、問いをたてて問題を追究・解決を目指すといった試みが目指されている。本校では現在 1 年生で歴史総合・地理総合が設置され、2 年生以上は旧課程の世界史 A（2 年生）・世界史 B（3 年生）が実施されており、本公開授業は 2 年生の世界史 A の授業内で、歴史総合や世界史探究を意識した授業実践を目指したものである。歴史総合は近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を修得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する科目とされている。従来の通史中心から、「近代化」「国際秩序の変容と大衆化」「グローバル化」の 3 つのテーマを軸に、生徒自身が知識を概念化することが重視されている。中学校までの学び、さらに必修科目である歴史総合を経て、選択科目として世界史探究があり、ここではそこまでに身に付けた歴史的思考力を生かして、諸資料を活用した学習が目標されている。

本校では毎年 9 月から 10 月にかけて東京学芸大学の教育実習生を受け入れており、今年も私が担当した実習生たちは世界史 A の科目の枠の中ながら、諸資料の活用や歴史的事象の概念化、生徒の話し合い活動等を盛り込んだ授業を試みていた。6 時間分の単元を入れ替わり立ち替わり異なる実習生が担当したため、そのまとめとしてアジアの近代を振り返る授業を実施し、今回の公開授業となる。授業内でも触れたが、今回テーマとした日清戦争は小学校・中学社会・日本史 A と多くの生徒にとっては何度も繰り返し扱ってきた既習事項である。どことどの戦争で、結果どうなったかは多くの生徒が知っている。そこで今回は日清戦争「再考」とし、「日清戦争の世界史における位置づけとは？」をメインの問いとした。日本・清・朝鮮の東アジアを中心とした視点から一步引き、東アジア進出を狙うロシアやそれを見つけるイギリス・ドイツといったヨーロッパの存在も視野に入れつつ、当時の世界状況を俯瞰し、生徒に日清戦争を世界の流れの中で再認識させることを目的とした。その際、歴史総合で目指される日本と世界を相互的にとらえる視点と、問いに生徒自身が答え学びを深める姿勢、世界史探究にもつながる諸資料の活用を意識した。

これまでの教員による情報伝達が中心の授業からの脱却を目指したい一方、世界史 A・B 科目を受験科目で使用する生徒もあり、知識の体系化とのバランスの取り方に苦慮しているのも事実である。本授業の最後に振り返るメインの問いへの取り組みは、構想時から 1 時間以上をかけて意見交換し振り返りをするとも可能であり、そのくらいの時間をかけねば消化できない問いではないかとの葛藤があった。今回の授業の取り組みを受けて、このバランスを見極めることも今後の授業者にとっての課題である。

相関係数を見直そう

～ 新たな問いを見出し、統計的探究プロセスを繰り返し回す ～

数学科（数学Ⅰ） 木部 慎也

1. 単元の目標

統計的探究プロセスの各段階と対応させながら、学習する統計量やグラフの意味と目的を理解し、振り返りから新たな問いの設定を繰り返すことでより深い統計的問題解決の活動を行うことができる。

2. レポート課題

単元のまとめとして、統計的問題解決の一連の力を評価するレポート課題を下記の要領で設定した。

(ア) 問題 調べたい事柄を明確にする

(イ) 計画 SSDSE または e-Stat から必要なデータをダウンロードする

(ウ) データ ①データ全体の分布の特徴を表現する(統計量、箱ひげ図などを想定)

②データの間にある関係を表現する(散布図、相関係数などを想定)

(エ) 分析 データから分かったことや、その要因について考察する

(オ) 結論 分析結果から結論をまとめ、振り返って新たな問いに繋げる

各項目でどのようなことが求められているのかを生徒に伝えるためにルーブリックを提示し、統計的探究プロセスを複数回積み重ねる活動となることを目指した。

3. 本時の目標

具体的なデータを扱っての相関係数の考察から、統計的探究プロセスの各段階との対応を考えることができる。特に、結論から新たな問いを見出そうとする。

4. 本時の教材

昨年度のレポートから、疑似相関についての理解が不十分であると思われる生徒が多いことがわかった。そこで、背景を想像できるような実際のデータを用いて、相関関係について考察する授業を計画した。

- ・ 相関分析の実例「ナイチンゲールと統計」

ナイチンゲールが相関分析を用いて大きな功績をあげた実例を共有し、現実的な場面に相関分析を用いる姿勢を共有する。

- ・ 実際のデータを用いて相関分析をする例「映画館と結婚」

“都道府県別の映画館数と婚姻件数の相関係数は 0.9 を超える。映画館を増やせば婚姻件数も増えるはずだ。”という見解を起点に実際にエクセルファイルを操作しながら議論を進めていく。議論の中であがった意見が統計的探究プロセスのどの段階に関わりが深いのかを振り返りながら、相関係数の扱いについて考察を深めていくことを目指す。

学びを社会へつなげる

～「遺伝子とその働き」ゲノムを題材に～

理科（生物基礎） 小境 久美子

理科の各科目では、日常生活や社会との関連を図りながら生徒の資質・能力を育成することが求められている。「生物基礎」では、生物や生物現象と日常生活や社会との関わりが重視され、生命科学の急速な進歩を反映した内容が扱われている。「遺伝子とその働き」の単元では、遺伝子とゲノムとの関係に触れることとなっており、オーダーメイド医療などが発展的な学習内容で教科書に取り上げられている。しかしながら、ヒトゲノム 解読完了から 20 年近くが経った現在、生徒が耳にするのは「ゲノム 解析」「ゲノム 編集食品」など技術の名称の方が頻度が高くなっており、自分自身のもつゲノムについての認識は高くないように見受けられる。また、オーダーメイド医療についても、当事者とならない限り強い関心はもちにくいものと思われる。

昨年度、第 20 回公開教育研究大会において、本校生物科の大谷教諭より「学びを社会へつなげる態度をどう評価するか」という研究課題で公開授業を行った。生徒は「遺伝子とその働き」の授業のまとめとして、学びを社会へつなげるキーワードを設定し、生徒が 2 分間の動画を作成した。予め授業者から提示したキーワードの例には、単一遺伝子病、多遺伝子疾患、ゲノムプロジェクト、オーダーメイド医療、再生医療、iPS 細胞、分化全能性、一塩基多型（SNP、スニップ）、ダウン症候群、色覚異常、新型出生前診断、エピジェネティクスがあった。生徒が設定したキーワードで最も多かったのは「iPS 細胞」で、「ゲノムプロジェクト」を選ぶ生徒は少なかった。日常、ニュースなどで耳にすることの多い用語に関心が高いことがうかがえる。

「ゲノム」に対する認識が低いことに比べ、「遺伝」に対しては日常生活で意識されることが多い。今年度、本時に先立って行った授業において、「遺伝するものと遺伝しないものをあげてみよう。容姿や声、趣味や知識など、さまざまな観点で考えよう」という課題で生徒どうしが意見交換を行った際には、遺伝するものとして、顔、身長、髪質、目の色、血液型、体型、病気のなりやすさなど、様々なものが挙げられた。

そこで本時では、「遺伝」と「ゲノム」をつなぐものとして、昨年度提示されたキーワードのうちから、一塩基多型（SNP、スニップ）、単一遺伝子病、多遺伝子疾患をとりあげることにした。ゲノムの個人差が 0.1%であることや SNP のデータベース検索を行うことを通して、ゲノムのわずかな違いによって形質の違いや病気が生じることを客観的に捉えられるように注意した。併せて、近年身近になってきている遺伝子検査についてとりあげた。

評価の観点では、ゲノムの個人差や遺伝子検査のメリット・デメリットについて、主体的に考察して表現しようとしているかどうかを「主体的に学習に取り組む態度」として記述分析することとした。

地学基礎における 「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラムづくり(2)

～ 生徒の主体性を育てるための評価 ～

理科（地学基礎） 齋藤 洋輔

理科（地学科）では継続的に、「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラムづくりに取り組んでいる。一昨年度に実施した第 19 回公開教育研究大会においては、同タイトルにて、1 年次の「地学基礎（2 単位必修）」のカリキュラムにおける「指導と評価の一体化」について提案した。そこでは、授業者が評価することへの負担が大きい（生徒へのフィードバックが遅れる）ことや、「学びに向かう力・態度」をどのように涵養し、どのように評価するか、という課題が見られた。そこで、これまでの実践も踏まえながら、観点別学習状況の評価が実際に始まった今年度の公開教育研究大会においては、特に生徒の主体性を育てるための評価に焦点をあてて、「指導と評価の一体化」を目指したカリキュラムについて改めて提案する。

具体的には、Google Workspace for Education をプラットフォームとして反転授業を年間通して実施することで、生徒が自主的に学ぶことを促した。また、それぞれの授業においても、1to1（1 人 1 台 PC）のデバイスを活用しながら、「学びに向かう力・態度」を含めた資質・能力を育成し、それを評価するパフォーマンス課題の場を設定した。このようなパフォーマンス課題を繰り返しながら、自主性を涵養するカリキュラムづくりを目指した。

なお、本公開教育研究大会においても対面での授業公開ができないため、動画配信でのカリキュラムの提案となる。そこで、動画配信の特徴を活かすと共に、これまでの実践の総決算の意味を込めて、地学基礎のカリキュラムがどのようなつくりになっていて、如何にして自主性を涵養するものかを中心に示したい。また、一昨年度の課題がどのように改善されたのかについても示したい。配信する動画では、一つの授業だけに焦点を当て過ぎずに、生徒の成果物とその評価の方法に焦点を当てながら地学基礎におけるカリキュラづくりについて提案する。

是非、公開授業の動画をご覧いただき、研究協議会にて参加者のみなさまから忌憚のないご意見を伺いながら、活発な意見の交換をお願いしたい。

日本歌曲を味わおう

芸術科（音楽Ⅰ） 居城 勝彦

本校の芸術科音楽では、学習指導要領に掲げられた目標に「人々が永きに渡って大事にしてきた音楽文化について追究する」を加え、活動を展開している。これまで音楽の学習では、生徒たちの音楽選択理由にも多い「歌いたい」を主軸に、他の活動との関連も図りながらカリキュラムを構成していたが、2020年4月以降は新型コロナウイルス感染防止のため、歌唱活動（斉唱、合唱）を控えていた。しかし、今年度からはマスク着用でできる限り距離をとりながら、歌唱活動に取り組んでいる。1学期は教科書教材のイタリア語とドイツ語の歌曲を歌唱した。2学期に入り、日本歌曲を取り上げている。

歌唱の活動では「自己のイメージを持って歌唱表現を工夫する」ことを目標として設定し、活動を展開することが多い。日本語での歌唱の場合「(歌詞や旋律などから) イメージを持つ」「イメージに合うように歌唱技術を選択して試行する」「自分自身の手応えと周囲からの評価をもとに、よりイメージに合う表現を究める」「演奏を振り返る」という一連の過程が学習活動の流れとなる。この「自己のイメージを持つ」段階において、最近では動画サイトを利用して参考となる演奏に触れることもある。しかし、生徒がその動画から演奏者の解釈や意図を読み取ることは難しい。読み取れたとしても、それは生徒の経験の範疇を越えることはないだろう。読み取りの幅を広げる経験が、学習活動の中で必要となる。その役割は教師による演奏や、言葉による説明であることが多い。この場合、生徒は受動的に活動に参加しがちである。生徒に対して主体的に活動に取り組む態度を求めるためには、さらなる工夫が必要であろう。

そこで今回は、歌曲の独唱者をゲストティーチャーとして迎え、演奏をすることはもちろん、生徒たちの問いかけにも演奏者として答えてもらう活動を計画した。生徒は教材となる曲に事前に触れていることで、楽曲そのものへの関心をもとに自分なりの解釈をするであろう。次に、それをともに学ぶ仲間と共有するだろう。日頃の授業ならば、ここで教師の指導が加わり、演奏を仕上げていくことになる。今回は、ゲストティーチャーの演奏を聴き、その表現がどのような解釈から生まれているのか、共演者である伴奏者とはどのように共通理解をして演奏しているのか、演奏技術そのものについてなどを、直接問いかけることを行う。生徒との解釈の違いもありうるし、解釈の違いから生まれる表現方法の違いも生まれるかもしれない。それを演奏として、その場で確かめることを取り入れる。そして、生徒本人の中での求める表現と出会う機会としたい。鑑賞する心地よさだけでなく、それをもとにした歌唱表現への試行も取り入れる。その際、ゲストティーチャーからアドバイスや評価をもらう機会も設定する。

生徒たちに授業前後で自らの演奏や曲に対する理解が変容することを経験させ、日本歌曲を味わうことに主体的な取り組む態度の育成を目指したい。この経験は、日本語以外の歌曲の歌唱や歌唱活動全般への向き合い方にも変容をもたらすことが期待される。

人々の生活を心豊かに演出しよう

～ キャンドルスタンドの制作 ～

芸術科（工芸Ⅰ） 神田 春菜

本公開授業では、「A 表現(2)社会と工芸」において、社会的な視点に立って主体的に学習に取り組むための指導と評価の工夫について提案したい。

社会的な視点に立って考えるためには、実際の使い手が第三者であったり、使用場面が公的な空間であったりと、自分の外側に目的を設定して発想や構想をし、制作する必要がある。一方で、本校の工芸選択者は自分が使いたいものを作りたいという強い思いを持って選択しているものが多く、社会的な視点に立って発想や構想をしていても、制作をしている間に、いつの間にか自分の作りたいものを作っていた、ということが暫し起こる。そのため、社会的な視点から制作を進めていくためには、授業全体を通して、想定している使い手や使用場面から、自分の作品を見つめ、目的に沿って制作することができているか、振り返りながら進めていくことができるよう、授業を展開することが重要となる。そのため、本題材では、使い手や使用場면을意識して一連の活動に取り組めるよう、第1次の段階で、作品制作や鑑賞活動における目標と評価ルーブリックを生徒達自身で考える活動を取り入れる。大まかな授業の流れは以下の通りである。

次	学習のねらい	主な学習活動
1	社会的な視点から工芸作品を見つめ直す	① やきものやその技法の魅力に触れる ② 社会的な視点から身近な日用品や工芸品（照明器具）を分析する ③ 作品に求められる条件と制作や鑑賞の目標と評価を考える
2	人々の生活を心豊かに演出するキャンドルスタンドを発想し構想する	① 使う人や使う場面を考えアイデアを出す ② 作品に求められる機能や造形を考える ③ 作品や三面図を作成して制作の計画を立てる
3	各自の計画に基づいて制作する	① 目標の確認と振り返りによるフィードバックを繰り返しながら作品を制作する（成形→乾燥→素焼き→施釉→本焼き）
4	お互いの作品を評価し合いながら鑑賞し、見方や感じ方を深める	① 目標に基づいて作品を制作することができたか実際に使用しながら評価し合う ② 工芸と社会の関わりについて自分の考えをまとめる

本授業では第1次の②及び③に当たる部分を予定している。教師の提示したパフォーマンス課題に沿って自分達で目指すべき方向性を決めることで、主体的に学習に取り組む中で学びが深まることを目指す。

米芾の書風を捉えよう

芸術科（書道Ⅰ） 荒井 一浩

新学習指導要領の本格実施1年目を迎えた。3年間に及ぶ移行措置期間においても芸術科は新しい学習指導要領によることができる教科であったため、その理念を授業に反映させ、さらなる指導と評価の一体化を図り、授業改善に資することができるよう試行を重ねてきた。

従前の観点別学習状況の評価では「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点が示されていたが、今回は学校教育法で規定された「学力の3要素」をもとに「資質・能力の三つの柱」として「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性等」とされた。そして、学習評価においても「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理し直された。

芸術科の立場からすれば、「知識」と「技能」がひとつの観点とされた点が大い。当然のことながら、今まで以上に「知識」と「技能」を関連付ける必要が求められるであろうし、その重み付けも考慮していかなければならない。

今次の公開授業では宋の四大家のひとり米芾（字は元章、1051-1107）の蜀素帖を取り上げた。授業クラスは1学年で、行書については1学期に基礎を学んだ後に集王聖教序から「大地」を半紙2字書きで臨書している。授業時間は4時間にとどまっており、丹念に書きぶりを追ったり書風という書の特徴を捉えたりというところまで進んではない。そこで、書風を効果的に捉えるため美術館から書を専門とする学芸員を招き、協働して授業を行うことにより博学連携を推進し、生徒の鑑賞の目を広げ、豊かな表現活動に生かしていくことを考えた。

美術館や博物館には様々な文化財が展示されているが、その多くにはキャプションが付されている。キャプションには作品名をはじめ、作家名（書者名）、時代（制作年）、素材、作品サイズ、由来等様々な情報が含まれているが、その一つに鑑賞の手がかりがある。もちろん鑑賞者は自由に作品を見て、解釈し、評価する権利を有しているわけだが、キャプションから書の見方や考え方を示唆され、それによって鑑賞の広がりや深みを感じられることがある。

こうした経験を踏まえ、ともに授業を作っていく学芸員から美術館で行われているキャプション作りの実際を学び、それを参考としながら生徒は蜀素帖に付すキャプションを作成する。そのキャプションを相互に閲覧し、鑑賞の幅を広げることで書風の理解に結びつけていきたい。

知的にチャレンジングな言語活動

～ 身近で複数の意見がある話題を通して ～

外国語科（コミュニケーション英語Ⅱ） 光田 怜太郎

英語を身につけるためには実際に授業内で英語を用いる活動が重要であるが、それらの「活動系」は英文読解に比べ難易度が低く力がかかれないと思われている節がある。本授業では力のつく言語活動のあり方を模索する。

本授業では、知的にチャレンジングな言語活動を実践し、提案したいと思う。身近で複数の意見がある話題を通して、生徒に思考を促し、英語で意見交換をしたり発表をしたりする。そのため、今回取り上げたテーマは、「郵便料金が不足しており、受け取り手は不足料金を支払ったのだが、そのことを送り手に伝えるべきか否か」というものである。伝えることによって、相手に恥ずかしい思いをさせてしまう (embarrassed) な思いをさせてしまうかもしれないし少額なのだから黙って払えばいいだろう、という考え方もあるだろう。その一方で、言わないことによって送信者は同じ「間違い」を異なる相手に繰り返してしまうかもしれない。もちろん、正解はない。さらに、高校生の柔軟な発想でここにはないようなアイディアがでることもあるだろう。本授業では、4～5名の班単位でアイディアを考え、教師およびクラス全体との共有は、英語を通して行われる。また、Padlet という Web サイトを利用し、各人および各班のアイディアが効率よく共有する方法を試行する。

本授業は5つのステップで成り立っている。日本人生徒 Toshi、交換留学生 Lisa、Toshi の ALT である Brown 先生。また Toshi と Brown 先生のあいだで登場する Mother と Brother である。Step I では、北海道に旅行している Lisa から Toshi のもとにメールが届き、美しい形式を絵葉書で送るという旨が述べられている。まずは、この状況を理解する。Step II では、数日後、Toshi が Lisa からメールを受け取ったのだが、切手料金が不足し受け取るために超過料金を支払ったのだが、その状況を Brown 先生に相談をする。このやりとりを音声で聞き取り理解したのち、自分が Toshi だったらどのように行動するのがよいか、班で考える。Step III では、Brown 先生のアドバイスを音声で聞き、Mother, Brother, Brown 先生の意見をまとめる。Step IV では、自分が Lisa の立場だったらそのようにしてほしいか個人で考える。Step V では今までのさまざまなアイディアや視点を踏まえて、再度班で Toshi はどのように行動するのが良いか、班で考える。これらのステップで、さまざまな視点から正解のない問題に取り組むことで、英語を通した知的活動を展開したいと考える。

研究協議会

12:45～14:45

国語科のこれまでの蓄積と観点別学習状況の評価

国語科 日渡 正行

今回の研究協議会は、「授業者 対 見学者」ではなく、授業者と見学者が同じ土俵にいて、事実起きた「授業という現象」について同じ立場で検討するという、「対話型」の検討会を実施する。新型コロナウイルスへの対応を挟みつつも、本校が何度か試みてきた協議会のあり方である。完成された提案であるとは言い難い今回の公開授業を素材にして、あるべき観点別学習状況の評価に至る方法を探ることができれば幸いである。

新しい学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」を評価することの困難さを感じている。提出物の有無や授業時間内での積極的発言ではなく、生徒が身につけた力としての「主体性」を見てとり、判断しなければならないからである。果たして、「主体性」はどのように観察対象として現れるのか。今回の授業では、授業で読解を進める前と後でどのような変化があったのかを自覚できるかどうか、ということを軸に「主体的に学習に取り組む態度」を見ていく。

ただし、今回の「主体性」の確認のしかたは、決して新しいものではない。単なる一学習材の読解にとどまることなく自分自身の価値観を変化させていくためには、自分の考え方を相対化することが重要である。従来の国語（「国語総合」「現代文B」等）でも、そのような自己の考え方の相対化の力を重視してきた。その力を育んできた方法は、新しい科目における観点別学習状況の評価にも活かすことができるのではないだろうか。

生徒が授業を振り返り、自分自身の変化について書く。そこで書かれたことを評価に組み込むのは、生徒の考えを一定方向に導いてしまう危うさを伴う。振り返りを評価に組み入れることを明言し、どのような振り返りを求めているかを伝えれば、ある一定の「型」を目指してしまうことになる。一方で、方向性を示さない振り返りでは、自由な反応を得られるかもしれないが、こちらの意図に適合するものだけの評価することになりかねない。授業を通しての変化を自然なかたちで自覚でき、その自覚を示すことができる課題が求められる。

今回の授業での振り返りとそれに対する評価は、うまくいっているとは言い難いかもしれない。方向性を示さなかった振り返りであり、初読と授業実施後の課題に変化がなかった、としている生徒も少なくはなく、評価として機能していない部分もある。しかし、従来の国語における授業や課題のあり方を活かし、新しい観点別学習状況の評価につなげていく試みとしては、成立していると思っている。「主体的に学習に取り組む態度」を新しい科目の中でどのように評価していくことができるのか、これまでの蓄積で活かすことができるものはなんであるのか、考えていきたい。

地理歴史・公民科における観点別評価の実施と検討

～ 本校における 1 学期の試みを振り返って ～

地理歴史科・公民科

本校の今年度の公開研究協議会では、テーマを「観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメントーいま問われる学習評価と学校のあり方」と設定し、今年度から本格実施となった観点別学習状況の評価を議論の主題とした。

今年度の地理歴史・公民科では、新科目の歴史総合・地理総合（いずれも 1 年生）と旧科目の世界史 A・現代社会（いずれも 2 年生）を対象とし、観点別評価での成績評価が本格実施されている新科目 2 科目と次年度の本格実施に向けて試行を行なっている 2 科目の 1 学期における取り組みを紹介する。観点別評価の実施については施行前より様々な議論が行われ、多くの学校から悩みとして聞かれたのが、「考え方や理念は理解できたが、日々の授業に落とし込んだ際にどのような頻度で、どのような課題を出し、それがどのように評価と結びつくのか、イメージがしづらい。」という声である。本協議会では本校の 1 学期に各科目で実際に行われた課題や生徒の成果物・それに対する評価を提示する。どのような課題設定が行われ、実際の授業の中でどのような成果物が生徒から提出されたか、それをどのように授業者は評価し、その後の授業展開に活用していくのかを、各授業者より解説する。

本校の 1 学期の実践をもとに、助言講師としてお招きする文部科学省初等中等教育局視学官 藤野 敦氏からの助言をいただき、可能ならば聴講者の皆様より実践や各校の状況を伺いながら、地理歴史・公民科の観点別評価の現状とあるべき展開を議論し模索していきたい。

観点別評価の充実と深い学びの実現に向けた単元計画

～ 単元「データの分析」に焦点を当てて ～

数学科

学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が謳われており、その具体的な姿として次のように示されている。

各教科・科目等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科・科目等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が鍛えられていくことに留意し、生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。(文部科学省、2019, p. 117)

本校数学科では従前から数学的に考える力を育むことを重視し、ときには学習指導要領や教科書で掲げられている内容のみに捉われないような本質的な理解を促す授業をおこなってきた。そのような中で、ある程度は主体的・対話的で深い学びを実現してきたし、その過程で、知識・技能の習得みならず、思考・判断・表現力の育成もおこなってきたと自負している。しかし、カリキュラム・マネジメントという視点に立てば、そのような学びを各単元のどこに位置付けるか、また単元をまたいで思考・判断・表現力をどのように育成し、それを評価していくか、主体的に学習に取り組む態度をどう評価していくかということが十分に体系化されてはいないという現状がある。これらを整備し、体系化しカリキュラムに位置付けていく観点別評価の充実が、喫緊の課題である。

そこで、本校数学科として本研究会では、主体的・対話的で深い学びを実現しつつ観点別評価が充実している単元計画を、数学Ⅰ「データの分析」の単元を例にして提案するとともに、その1つの授業実践を紹介する。研究協議会においては、(1)思考・判断・表現力の育成という目標に対する本実践の価値、(2)実際の授業で深い学びを通じた思考・判断・表現力の育成がいかにおこなわれたか、(3)観点別評価などについて意見を伺い議論を深めたい。

引用文献

文部科学省(2019) 『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 総則編』

学びを充実させるための観点別学習状況の評価

理科

今年度から高等学校で実施されている観点別学習状況の評価であるが、生徒が主体的に学ぶ過程を評価することに課題を感じている高校教員も少なくないことだろう。そこでは、理科を学ぶ意義や有用性について、生徒自身が実感できていることが重要となる。そのために、授業内容と日常生活や社会との関連を図ることが求められる。昨年度、公開教育研究大会の理科協議会においては、「主体的に学習に取り組む態度をどう評価するか」というテーマで議論を行ったが、その中でも、学習した内容と実社会との関連を伝える必要性が話された。

今年度、助言講師としてお迎えした東京学芸大学教育インキュベーション推進機構 三石 初雄 先生は、著書『理科教育』（教科教育学シリーズ④、2016）の中で、生徒の「なぜ理科を学ぶのか」という問いに留意すること、現代に生きる生徒にとっての自然と科学・技術とその歴史との関わりを学んでいけるようにすること、を指導のうえで配慮すべき点として挙げている。これは、「どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか」という「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の育成に関わるものであろう。一方で、この資質・能力には、「知識・技能」の習得も不可欠であり、生徒が何をどのような順序で学ぶかといった教材の配列も熟考されるべきものであろう。また、社会の様々な課題に向き合う際の思考、判断も求められる。

本校理科ではこれまで、「指導と評価の一体化」を目指し、探究活動とも関連づけて、コンピテンシー・ベースのカリキュラムづくりと実践を重ねてきた。「地学基礎」では、単元の適切なところでパフォーマンス課題の場を設定し、それを繰り返すことでコンピテンシーの変容を評価することに努めている。「生物基礎」では、学びを社会へつなげる態度の育成を目指し、科学技術と生徒たち自身との関わりを取り上げた授業を行っている。いずれも理科の性質として、事実を認定した上で根拠と結論を述べること、学習において自分で足りない部分を改善できていること、今後どのように学習を進めていくかを生徒自身が考えられること、などを評価の材料としている。

昨年度から理科の中心的研究主題である「主体的に学習に取り組む態度の評価」について、学習指導要領等の解説には、「粘り強い取り組みを行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」という2つの側面が説明されているが、本研究協議会では、教科を超えた汎用性の高いアプローチとしての自己調整能力の育成を提案したい。また、「なぜ理科を主体的に学ぶのか」「なぜ理科を学ぶ必要があるのか」「なぜ科学者はこの研究を行っているのか」を生徒が考えられるよう促したい。特に科学技術については、リスク・ベネフィットを考慮し、意思決定場面を積極的に導入することで、理科において価値選択的課題にどう向き合うかを考えていきたい。

音楽文化として日本歌曲を取り上げる際の教材化の視点

芸術科（音楽） 居城 勝彦

高等学校芸術科音楽では小・中学校の音楽科に引き続き、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育てようとしている。音楽の授業で取り上げる楽曲（教材）は、必ず成立背景を持っている。それは一朝一夕に出来上がったものばかりではなく、人々が永きにわたって培ってきた音楽文化を背景としている場合が多い。

日本歌曲も、明治期以降盛んとなったいわゆる西洋音楽の様式の中に、日本語の歌詞の持つ抑揚やリズムを取り入れて創られ続けている音楽文化である。多くの作曲家が日本語と西洋音楽の様式との融合を図り、作品を残してきた。その中には中学校や高等学校の教科書に掲載され、歌唱され続けている曲もある。

また、多くの生徒たちは小・中学校で日本語の合唱曲に触れている。日本語の歌唱経験は積んでいるが、合唱曲として仕上げる活動に重点が置かれ、日本語の響きや成立背景に着目した楽曲の解釈を活動として取り入れることは機会として少ないだろう。そこで今回は後者を意識しながら活動を展開したい。

教材として日本歌曲「さくら横ちょう」を取り上げている。その理由は以下の通りである。

- 1) 作詞者の加藤周一は、生徒たちにとって国語科の学習で触れる機会のある作家である。
- 2) 詩の言葉がわかりやすく、加藤周一自身が代表的な著書「羊の歌」の中でもこの詩の成立背景に触れており、生徒が作品解釈の参考としやすい。
- 3) 同一の詩をもとに3人の作曲家（別宮貞雄、中田喜直、神戸孝夫）が作品を作っているため、曲想の違いから音楽的比較が活動として設定可能である。
- 4) 3曲とも生徒が歌唱に取り組める部分が多い作品である。
- 5) 演奏には訓練された歌唱技術が必要な部分もあるが、そこも含めて芸術作品として触れる価値はあると考えられる。

高等学校芸術科音楽の教科書には複数の日本歌曲が取り上げられているが、日本語の歌詞が唯一の共通点という場合が多く、楽曲比較から何かに気づくという活動が設定しにくい。今回は同一の詩をもとに作曲されているので、音楽的な比較がしやすい。また、3曲とも生徒が歌唱に取り組むために適度な難易度であると考えられる。どの曲も平易な部分ばかりではないが、そこそが芸術科音楽の教材としては大事な部分である。歌唱技術の習得と楽曲解釈の両面から曲に向き合うことで、日本歌曲の持つ魅力に迫れるだろうと考えられる。

研究協議会では、さまざまな音楽文化を教材として活動する芸術科音楽において、日本歌曲を教材とする際の視点（楽曲選択、活動の展開、学習に取り組むことで期待される生徒たちの変容など）について、参会者の皆さん・ゲストティーチャーの演奏家・助言講師の先生と協議を深めていきたい。

観点別学習状況の評価の課題

～ 主体的に学習に取り組む態度に着目して ～

芸術科（美術工芸） 神田 春菜

学習指導要領の各教科・科目の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿って再整理され、本年度から本格的な実施が始まった。美術及び工芸では、知識として〔共通事項〕の内容が新しく導入されたり、表現と鑑賞の内容が分野ごとに整理されたりすることで、今まで以上に関連付けがわかりやすく提示されたことが一番大きな変化と考えられるが、この協議会では「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当てたい。

主体的に学習に取り組む態度について、学習指導要領の解説等では「① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面」「② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面を育成するとともに評価することを求めている。美術や工芸においては何となく作品を完成させたり鑑賞したりするのではなく、題材のねらいを踏まえた上で、その目指すべき方向に沿って考え、表現や鑑賞の活動に取り組んでいく姿勢を育むことが大切であろう。生徒が身近に感じられる題材を設定することが、最も大切なことではあるが、それ以外にも、授業の目標は何であるか、どのような視点で考える必要があるか（工芸の場合、身近な生活場面からなのか、社会的な視点からなのかなど）を共有することも重要である。

一方で、生徒によって得意不得意やこだわりたい部分は異なるため、それぞれの状況に応じて、主体的に学びを深めることができたのかを評価及び指導していくことも忘れてはならない。そのためには、生徒が制作や鑑賞を通して何を目指しているのか、授業の取り組みの様子や振り返り、自己評価などを通して、生徒が自身の学習どのように把握しているかを見取る必要がある。以上のことを踏まえ、本校では今年度から主体的な学習に取り組む態度の指導と評価を以下のような形で行なっている。

〔生徒が取り組む内容〕

- ・毎授業の取り組み（途中経過の作品やワークシートなど）と振り返りをGoogle スライド（プレゼンテーションソフト）を利用してポートフォリオとして記録に残す。
- ・（2学期以降）題材のはじめに、授業の目標を踏まえて各自で目標とルーブリック評価を設定させ、題材の終わりの段階で自己評価を行う。

〔教師が取り組む内容〕

- ・授業の取り組みの様子を、授業者が設定した評価規準と生徒の立てた目標と照らし合わせながら記録を残す。

もう少し具体的に触れておく。振り返りに関しては、令和元年度までは、授業の振り返りをワークシートで記録させてきた。令和2年度からは生徒に1人1台PCの実践が導入されたため、途中経過の作品やアイデアスケッチを記録として残せるようGoogle クラスルームの課題の機能を使って写真とコメントを提出する形に変更した。写真の記録を残せることは毎授業の変化を後から見返したり、消してしまったアイデアをもう一度見返せたりするなどの利点が多かった。一方で、1人1人の1年間の記録を後からまとめて見ることが難しかった（図1）。そのため、今年度からはGoogle スライド（プレゼンテーションソフト）を利用し、1回の授業の振り返りを1スライドの形で記録を残す形に変更した（図2）。この方法に変えたことで、年間を通しての生徒の変化を見ることが容易であり、生徒自身も自分の活動を振り返りやすい形となった。

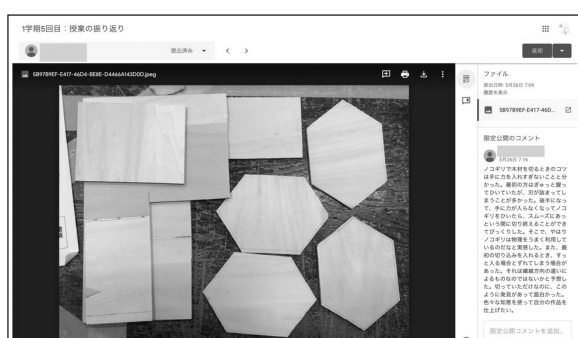


図1 Google クラスルームの課題の機能を使った提出



図2 Google スライドによるポートフォリオ

ただし、目標に向かって粘り強く、自己調整しながら取り組んでいるかどうかは、生徒の目標がどこにあるか見えていないと判断しにくい部分があった。授業での生徒の取り組みを見ていれば大まかには把握できるが、教師側の先入観で判断している可能性も高い。主体的に取り組む様子を見取るための指標がなければ、主観的な評価になりかねない。

改善策として、2学期以降の題材からは、題材の内容や教師が提示した授業の目標を踏まえた上で、自分自身の目標と評価を「アイデア出し」「作品制作」「鑑賞」の三つの観点から立ててもらい、それに対してどのように取り組み改善していったかを振り返るように変更する。それらをワークシート及びポートフォリオに記載することで、生徒が意識して発想や構想をしたり、作品を作ったり、鑑賞したりできることをねらっている。また、生徒の状況により適した指導を行えることが期待できる。

研究協議会では、本校の取り組みを紹介するとともに、参加者の皆様が実践されている内容や課題を話し合うことで生徒にとって深い学びとなるような指導の工夫と一緒に考えていきたい。

博学連携と観点別学習状況の評価

芸術科（書道） 荒井 一浩

美術館や博物館には、資料収集、保存修復、調査研究、展示等多くの役割があるが、近年注目されているのは教育普及の分野ではないだろうか。

例えば、東京国立博物館のホームページを閲覧すると「教育」を紹介するページには「スクールプログラム」「一般向けプログラム」「ファミリー・子供向けプログラム」「学校の先生方へ」「ボランティア活動」「インターシップ」「キャンパスメンバーズ」「アウトリーチプログラム」といったページが用意され、活動の様子の紹介や参加の案内が供されている。展示を鑑賞しながら取り組めるワークシートやぬり絵、ワークショップも紹介されている。

今回協力いただく五島美術館でも、「美の友会」「茶の友会」という二つの友の会を設置し、月例美術講座、茶会等を催している。また、展覧会カタログや名品図録を発行し、関連する大東急記念文庫では研究者を対象として古典籍の閲覧や学術書の発行を行っているようである。

こうした環境の中、学校から社会教育施設としての美術館へのアプローチは決して多いとは言えないのではなかろうか。そこで今次の公開教育研究大会では同じ世田谷区内にある五島美術館の書を専門とする学芸員に協力いただき連携の一つのスタイルを模索した。公開授業を踏まえてのあり方と今後の展望を話し合いたい。

また、本大会の研究主題「観点別学習状況の評価を活かしたカリキュラム・マネジメント～いま問われる学習評価と学校のあり方～」を踏まえ、

「知識」と「芸術表現のための技能」の関連について

「思考・判断・表現」を充実させる方策について

自己調整力の育成について

「感性や思いやり」の観点別学習状況の評価での扱いについて

観点別学習状況の評価を活かした資質・能力の向上について

等々について参会者の意見をいただきながら、議論を深めていきたい。

知的にチャレンジングな言語活動を展開する授業のありかた

～ コミュニケーション活動に適した教材とカリキュラムを考える ～

外国語科（英語） 光田 怜太郎

高校の英語の授業は講義形式が主流であり、言語活動は知的な営みでなく、生徒の学力を伸ばすものと思われていない。本授業研究において、知的でチャレンジングな言語活動を提案するが、知的ということは、必ずしも政治経済や種々の社会情勢ならびに科学技術などの話題に触れることをここでは指していない。身近な話題について、様々な状況や意見、各人の立場を念頭に入れ、十分に検討し時には迷ったうえで、自分の意見を述べる活動である。今回は、そのような活動ができる教材として「送られた絵葉書の郵便料金が不足していた場合、相手に伝えるか否か」という場面を設定した。授業者は、この状況について状況をまず理解させ、生徒のグループで考え、その後数種類の考え方を示したり、相手の立場に立って考えたりしたあとで、改めて再考するというプロセスを踏み、英語を用いた生徒の知的学習活動を促進する。

また、ICT 機器を積極的に使い各生徒やグループの意見を効率よく収集・共有できるよう試みた。多人数の教室で、円滑なコミュニケーション活動を実施するためには、ICT 機器の活用は欠かせない。

本授業を受ける生徒の特性としては、日頃より「コミュニケーション英語」の教科書の文章等を通して長文読解には慣れており、リテリング等を通して英語を用いる活動はしているが、与えられたテーマに沿って自ら考え意見を述べる活動には慣れているとは言えない。本単元では、日常生活において複数の意見が出るとされるテーマを設定し、それについて理解し自分の意見を表出するという日頃よりも負荷の高い活動を試みる。

現行のカリキュラムの問題点としては、言語活動と思われているものが道案内だったり買い物だったりする。たしかに、これはコミュニケーションを実践する場面として容易にイメージすることができるが、高校生が思索したり熟考したりする要素はない。一方「英語コミュニケーション」、「コミュニケーション英語」の教科書に載せられている題材はどうか。世界平和や科学技術など、高校生段階で外国語を通して身につけたい教養としてはふさわしく、これはこれで是非とも必要なものであるが、果たしてこれが教室ならびに日常でのコミュニケーション活動につながるかは疑問である。このバランスの悪さが現場でコミュニケーション活動が浸透しない原因であると考ええる。この中間、すなわち身近な話題だが答えが一つではなく結論が簡単に出ない問いを提供する教材と、それを支えるカリキュラムデザインが是非とも必要である。

講演会

15:00～17:00

新教育課程における観点別学習状況の評価

～ 資質・能力の向上にどう活かすか ～

東京大学名誉教授，帝京大学中学校・高等学校校長補佐 市川 伸一先生

本講演会では，東京大学名誉教授であり，現在，帝京大学中学校・高等学校校長補佐を務められている市川伸一先生をお迎えして，観点別学習状況の評価について議論を深めていく。市川先生は，中央教育審議会 教育課程部会副部会長，児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ（以下，WG）主査として，今回の学習指導要領と指導要録の改訂について審議された。また，ご専門は認知心理学・教育心理学で，認知理論に基づいた学習過程の分析と教育方法の開発に長年取り組まれている。

東京学芸大学附属高等学校（以下，本校）の公開教育研究大会においては，『学習評価』を軸としたカリキュラム・マネジメント」をテーマとして取り上げ，観点別学習状況の評価の導入に向けて，評価を活かした教育活動の改善について議論を重ねてきた。とりわけ「主体的に学習に取り組む態度」の評価については検討を重ね，評価する場面を設定し，実践を積み重ねてきた。今年度は新学習指導要領実施の初年度であり，評価の実践を踏まえて学習指導の改善に努めた結果，いくつかの課題が浮かび上がってきた。このような現状を受けて，本講演会では前半と後半で形式を変えて，観点別学習状況の評価について議論を深めていく。

前半では，市川先生から，WGで議論された観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえ，「指導と評価の一体化」を具現化した授業実践についてお話し頂く。その中では，「習得と探究」の学習サイクルをもとに，いかに「主体的・対話的で深い学び」を実現するかという授業例を紹介して頂く予定である。また，「主体的に学習に取り組む態度」についての評価を考えるのに重要な側面である「学習の自己調整」についても，日常的な教科の授業や生徒向け「学習法講座」の実践を通してお話し頂く。前半終了時にフロアからの質疑応答もお受けし，評価を実践に活かす方策について，議論を深めていきたい。

さらに，後半では座談会として本校教員も登壇し，観点別学習状況の評価について，さらに議論を深める。本校からは，齋藤 洋輔（ファシリテーター，地学），松本 至巨（現研究部主任，地理），荒井 一浩（書道），若宮 知佐（現代文）の4名が登壇する。観点別学習状況の評価を話題の中心に置きながらも，本校の実情なども交えながら，「指導と評価の一体化」を実現した授業の持つ可能性など，広く議論したい。

本講演会が，新教育課程の中で，指導と評価を連動させるための一助となれば幸甚である。

